

## 40 占領期における急性感染症の発生

## 推移 (一九四五年—一九五一年)

田中誠二・杉田 聡<sup>1)</sup>  
 森山敬子・丸井英二<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 順天堂大学医学部

<sup>2)</sup> 大分大学医学部

<sup>3)</sup> 西南女学院大学保健福祉学部

有効な感染症対策を樹立するためには、正確かつ迅速な実態把握が必要である。現在、わが国では世界的にも優れた保健医療統計を完備し、各種感染症に関する情報を継続的に収集・整理している。しかし、この整備されたわが国の感染症統計においても、第二次世界大戦中から終戦後にかけての期間は、厚生省(当時)による公的な報告として詳細なものは残されておらず「空白の期間」となっている。一方、占領期の保健医療改革に大きく関与した連合国占領軍総司令部公衆衛生福祉部 (GHQ/SCAP/PHW) は、占領政策を順調に遂

行するため、わが国の健康状態を綿密に調査していた。なかでも占領軍の兵士の身に直接影響を及ぼす恐れのある急性感染症については極力、情報を収集していた。

現在、われわれは、国立国会図書館憲政資料室に GHQ 文書 (マイクロフィッシュ) として所蔵されている Weekly Bulletin から急性感染症に関する史料を選び、占領期における急性感染症の発生推移を系統的にまとめている。その中間報告として、昨年の日本医学学会総会 (中津市) にて、一九四六年四月から一九五一年三月までの記録を疾患別・月別にまとめて発表した。しかしながら、Weekly Bulletin に付録として記載された感染症統計にはそれ以前、すなわち終戦から一九四六年三月までの約七ヶ月分の記録が存在せず不明のままであった。

その後、調査を進めるなかで、一九四五年十月から一九四六年三月までの都道府県別・週別の記録を PHW 内の人口統計課 (Health Statistics Branch) の史料に発見した。そこで、本報告では、新たに発見さ

れた六ヶ月分の感染症統計を追加し、占領期における急性感染症の発生推移を考察する。

一九四五年十月から報告された疾患は、「ジフテリア」、「赤痢」、「腸チフス」、「バラチフス」、「天然痘」、「発疹チフス」、「猩紅熱」、「流行性髄膜炎」、「コレラ」、「ペスト」の全十種類である。

「ジフテリア」の発生推移を見ると、いずれの地方も罹患率は冬季に高く、夏季（特に八月）に低い。一九四五年十一月から翌年三月までの期間は四国地方で罹患率が最も高いが、それ以降は、年間を通して北海道で比較的高く、関東、近畿地方で低い。

「天然痘」の全国的な発生推移を見ると一九四六年三月をピークとする散発的な流行があり、その後は目立った流行がない。地方別に見ると、各地方で三月、四月に最も罹患率が高くなり、特に、北海道、近畿地方で罹患率が高かった。流行は兵庫県に始まり、近畿地方から北は中部、関東地方、南は中国、四国地方へと感染が広がる。この流行において、高い罹患率を記録した地域は、順に、大阪府、兵庫県、東京都、北海道、

愛知県であった。

「発疹チフス」も天然痘と同様に、占領初期（一九四六年三、四月）に大きな流行があった。最も罹患率の高かった近畿地方では一九四六年一月から急激に増加し、三月にピークを迎える。関東地方は、近畿地方からひと月遅れで罹患率が上昇し、四月に最も高くなる。

占領初期から記録が残された各種感染症については、その発生推移を、終戦直後から占領期のほとんどの期間において、ある程度まとめることができた。今後は、途中から追加され記録が残された各疾患についての分析を進めるとともに、Weekly Bulletinの記述事項と関連づけて検討し、占領期における感染症対策の実態を解明していくことが課題である。

本研究は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）「占領期の保健医療政策決定過程に関する考察—GHQ/PHW文書を用いた検証—」（研究代表者：杉田聡）および萌芽研究「GHQ文書を用いて戦後五年間の感染症流行を解明する研究」（研究代表者：丸井英二）の成果の一部である。